休屠王の金人に就いて

文學士　羽溪了諦

一

支那に於て撰出せられた佛敎編年史籍には、大抵皆周の時代に佛敎的消息が支那に傳はり、秦の時代に西域佛僧が支那に來つたといふやうな記事を載せてをるが、(一)之等は『周書異記』とか『白馬寺記』とか『天人感通傳』とかいふ如き、後世僞作の書に據つたものか、若しくは『列子』中の怪しい一節を牽强附會したものか、いづれかであつて史的事實としては全く一顧の價もないものである。然るに、今茲に論究せんとする休屠王の金人が前漢武帝の時代に支那へ齎されたといふことは屢々正史の上に記載せられてをる所であり、而も後世多くの學者はこの金人を以て佛像であると推定してをるのであるから、之は啻に支那佛敎史研究上觀過することの出來ない記事であるばかりでなく、正史の本文を正當に解釋するといふ方面から觀ても、可なり重要な問題であると考へる。

二

休屠王の金人に關する記事の最も早く現はれてをるのは『史記』卷一百十匈奴傳である。『史記』に於ては、只この匈奴傳に於ける一ケ所の記事に止つてをるが『前漢書』に至ると、之に關する記事が卷六武帝紀と卷二十五(下)郊祀志と卷二十八(上)地理志と卷五十五霍去病傳と卷六十八金日磾傳と卷九十四(上)匈奴傳との六ケ所に掲載せられてをる。

まづ之れ等の記錄を綜合して、休屠王の金人に關する由來顚末を叙述しよう。前漢武帝元狩二年（西紀前一二一年）春三月、漢使驃騎將軍霍去病が一萬の騎兵を將ゐて、隴西（現今の甘肅省甘州府の古名昌府）を出で、焉耆（支）山（現今の甘肅省甘州府山丹縣の東南に在り。東西百餘支里。南北二十支里）を過ぎ、千餘里の地に於て、匈奴と戰ふて大捷を得、敵を斬首虜獲すること八千九百六十級に及び、それと同時に休屠王の祭天の金人を獲たのである。霍去病はその分捕品たる金人を武帝に献上した所が、武帝は之れを左憑翊雲陽縣（現今の陝西省邠州淳化縣の西南）の甘泉宮に祭り（二）、尙又同縣には匈奴の祠たる徑路神祠を建てこゝに休屠王を祭つたのである。（三）然らば何が故に武帝はその敵であつた匈奴の休屠王を內地に於て祭るやうになつたのであらうかといふに之には頗る興味探い因緣がある。

前述したやうに、元狩二年春霍去病將軍が匈奴と戰ふて大捷を得たが、又その夏將軍は隴西を出で北方二千里の地に於て居延（現今Edsinei河の流入せる居延海）を過ぎ、祁連山即ち天山を攻めて、是れ亦更に一層の大勝利を得たのである。そこで、匈奴の伊稚斜單于は匈奴の西方に居る休屠王及び渾邪王が屢々漢軍の爲に殺虜せられ、斯る大敗を招いたことを憤つて、其の歲の秋彼等兩王を召還して、誅罰を加へんと欲した。之を耳にした兩王は大いに恐れて漢に降服せんと謀つた。併し、霍去病將軍の彼等を迎へんとするや、休屠王は漢に降ることを悔み之を思止らんとしたから、渾邪王は彼を殺して、その衆を率ゐて降り、漢の列侯となつた。然るに休屠王の太子日磾は當時十四歲の若年であつたが其父漢に降らなかつた故を以て、其母閼氏（唐の顏師古の註に依れば、閼氏とは匈奴の皇后の稱號である。）と其弟倫と俱に宮輸黃門に沒入して、馬を養成することゝなつた。其後久しくして武帝游宴を催し、馬の檢閲を試みた時、數十人各馬を率いて殿下を過ぐるや、一人として武帝

を竊視せないものはなかつた。然るに、日磾は只獨りかゝる卑劣なことを敢てせず、其身長は八尺二寸其容貌は甚だ嚴しく、威風堂々として過ぎさり、而も其率く所の馬は太く逞しい良馬であつた。そこで、武帝は異みて、其の何者たるかを問ふたのに對して日磾は具さに已か休屠王の子たることを告げた。その事情を聞いて、武帝は甚だ之を奇とし、即日湯沐衣冠を賜ひ、拜して馬監遷待中駙馬都尉光祿大夫と爲した。かくて、日磾は武帝に親近することを得たが、其後些しの過失もなかつたから、益々帝の信愛を得て、或時は數千金を賞賜せられ、出づれば則ち驂乘し、入れば則ち左右に待するといふ有樣であつた。そこで、貴族は彼を怨んだけれ共、帝は益々彼を寵遇した。その後彼の母病歿するや、帝は詔して其肖像を金人の祭つてある甘泉宮に圖畫せしめ、休屠王閼氏と署さしめた。日磾は常に其畫像を禮拜し、涕泣して去つたといふことである。

斯くの如く武帝が日磾の母の肖像を甘泉宮に畫かしめたのは、其母が生前二人の子即ち日磾と其弟倫とを敎育すること甚だ法度に適ふてゐた爲、武帝の嘉賞を受けてゐたことが、其の一原因であつたらしいが、併し其主な原因は武帝の日磾に對する愛情の發露であつたに違ひない。かやうに日磾を鍾愛するあまり、其母の肖像を甘泉宮に畫かしめたくらゐであるから、武帝が彼の父休屠王を徑路神祠に祭らしめたのは當然のことであると言はねばならぬ。而して顏師古の註に依ると、所謂徑路神祠とは元匈奴の祠であるといふことであるから、匈奴の休屠王を祭つた祠を徑路神祠と名けたのであらう。尙又日磾の字は翁叔といひ、其姓は金といつたと傳へられてをるが、惟ふに其金といふ姓は彼の父休屠王の金人に因んで武帝が特に彼に與へたものであらう。

之を要するに、武帝は元狩二年霍去病が匈奴を征伐して分捕つた金人を雲陽縣の甘泉宮に祭り、又其持主であつた休屠王を同縣の徑路神祠に祭り且其皇后の歿後は其太子日磾の爲に其肖像を甘泉宮に畫かしめたのである。

三

支那正史の上に示されてをる休屠王の金人に關する由來顚末は前說した所に盡きてをる。しかし只これだけの記事を以てしては、其金人の何ものたるかを解決すること不可能である。實にこの問題を解決することが本研究の目的とする所であるが、先づ其道行として霍去病の金人を獲た地方に就いて一言して置かねばならぬ。殊に其金人の本來の所在地に關しては、古來甚だしい謬說が行はれてをるのであるから、之を論破して置く必要がある。

大体、霍去病將軍の金人を獲た地方に就いては

正史の上に明示せられてゐないのであつて、匈奴傳に於ては前述したやうに隴西を出で焉支山を過ぎて千餘里の地と記され、武帝紀に於ては隴西を出で皐蘭に至りてと錄され、又霍去病傳には轉戰六日焉支山を過ぎて千有餘里短兵を合して皐蘭山下に塵しにしたとあるに過ぎない。こゝに吾人の注意すべきところは、霍去病が匈奴を破つたといふ皐蘭山であつて、此山は焉支山のある今の山丹縣より千支里以上距つた所に在らねばならぬ。『歷代地理志韻編今釋』に於ては、之を今の喀爾喀に當てゝをるが、その音は皐蘭と多少相通ずる所あるけれ共、焉支山の所在地から內蒙古の喀爾喀に至る距離は正史の示すところと大差あるから、此說には同意しかねる。大体休屠王は匈奴の西邊に據つてゐたといふのであるから(四)彼の擊破せられた皐蘭山は喀爾喀などよりも遙か西方に在らねばならぬ。されば沈欽韓が皐蘭山を以て張掖塞外

に在ると觀たのは(五)正當な見解である。が併し彼はその塞外いづれの地にあるかを明示してゐない。實際、今日之を明示することは困難であるが或は現今の庫諾雷山ではなからうかと想はれる。庫諾雷山は張掖塞外の北方約五百支里の地にあつて、焉支山の所在地たる山丹縣より通路に沿ふて赴いたならば、正史に示すが如く千餘里に達するであらう。且又皐蘭と庫諾雷とはその音に於て幾分相通ずる所があるから、多分正史に所謂皐蘭山は現今の庫諾雷山であらうと考へる。假令両山を相當せしめることが間違ひであるとしても、皐蘭山は張掖塞外の北方若しくは西方五六百支里の地域に在らねばならぬ。若し果して然りとすれば、張掖塞外の皐蘭山附近に於て休屠王の祭つてゐた金人が漢の將軍霍去病に分捕られて今の陝西省郴州内に在つた甘泉宮に移されたといふことになるのである。

然るに曹魏の孟康は『前漢書』匈奴傳の註に於て「匈奴祭天處本在雲陽甘泉山下、秦奪其地、後徙之休屠右地、故休屠有祭天金人象也」と述べてをる。惟ふに、彼は『前漢書』地理志に於ける雲陽縣の條下に「有休屠金人及徑路神祠三所越巫鴈鄭祠三所」と記せる一節を誤解したから、斯る註釋を試みたのであらう。即ち彼はこの一節を雲陽縣に休屠王の金人や匈奴の徑路神祠などがあつたといふ意味に解したから、最初雲陽縣に在つたものが後に至つて秦の勢力に逐はれて、焉支山より千餘里距つた休屠王の地に徙され、此處に於て霍去病の獲る所となつたと考察せざるを得ないやうになつたのである。而してかゝる考察は甚だしく歴史的事實と撞着してをる。既に沈欽韓の言つてをるやうに、雲陽が秦の領地と爲つたのは久しい以前のことであつて(六)、始皇十年には太后を甘泉宮に迎へ同十五年には韓非が雲陽で死んでをる。(七)

而も『史記』の匈奴傳に依ると、匈奴の冒頓單于が燉煌祁連（天山）の間にゐた月氏（Tukhāra）を擊破したのは、漢文帝前四年（西紀前一七六年）であり、更に月氏をして西方に走らしめたのは老上單于の時代（西紀前一七四—一六一年）であるから秦が雲陽を奪つた當時に於ては、未だ張掖塞外の地方は匈奴の領有する所となつてゐなかつたのである。さすれば孟康の說の如く秦が雲陽を奪ふた時匈奴がその地に在つた金人を未だその勢力範圍となつてゐない張掖塞外の地に移したといふやうなことのあり得べき筈がない。

斯る見易い錯誤に滿ちた註釋が其後『晉史』『隋史』などの正史に襲用せられたといふことは頗る怪しむべきことであると言はねばならぬ。

四

扨、これより問題の中心に進入して、休屠王の金人の何ものたるかを研究しよう。『魏書』卷百十四釋老志には此問題に就いて次のやうに說いてある。

> 案漢武元狩中、遣霍去病討匈奴、至皋蘭過居延、斬首大獲、昆邪王殺休屠王、將其衆五萬來降、獲其金人、帝以爲大神、列甘泉宮、金人率長丈餘不祭祀、但燒香禮拜而已、此則佛道流通之漸也、

釋老志に於ける此記事は後世の佛敎史家に大影響を與へたのであつて、佛敎編年史籍の多くには佛敎東傳の最初として之が引用せられてゐる。此記事中「金人率長丈餘不祭祀、但燒香禮拜而已」とある一節は編者魏收がその當時行はれた佛像及び之に對する儀禮を觀て附註を加へたものであるにも拘らず、支那佛敎史家の多くは前漢武帝が其金人に對して燒香禮拜を行ふてゐたかの如く傳へ、之を以て中國に於ける佛敎流通の濫觴であるとしてゐる。大体、『魏書』の撰者魏收は熱心な佛敎歸依者であつたから、かくの如く何等の根據なしに甘泉宮に祭られた金人を以て佛像であるかの如く

傳へたのである。すでに正史に於てかゝる記事が掲載せられた以上は、佛教史家が皆之に基いて佛教東傳の權輿を此金人の傳來に置くのは當然のことであるといはねばならぬ。

併し此金人を以て佛像と見做すことは、啻に佛教史家ばかりではない。古來一般の學者も亦多く之を佛像と斷定してをる。三國時代に『西漢書音釋』四十卷を撰出した張晏の如きは、霍去病傳に於ける金人に對して「佛徒祠金人也」と註して、休屠王の金人が佛徒の祠る佛像であつたかの如き意を漏らし、又唐の顏師古は匈奴傳に於ける金人を釋して、「作金人以爲天神之主、而祭之、即金佛像是其遺法」と錄し、尙宋の鄭樵も亦顏師古と同じく「蓋天神之主即今佛像是其遺法」と陳べてをる。(八) しかし之等は只その當時の佛教徒が金佛像を以て諸天の上に位せる最上尊として禮拜してをるのを觀て、憶測を逞しくしたに過ぎないので何等根底のある見解ではない。

この金人を以て佛像と斷定することに對して多少考證を試みたものは、只宋の程大昌ばかりである。彼は佛教の史的方面に對して、屢々評論を加へてをるが、何れも皆淺薄極まるものである。その一例を擧げると、外國地理書難信といふ題の下に玄奘の『西域記』の如きは只佛教を誇張せん爲に編纂したものであつて、僅か十年の日程を以てして九萬里を周徧して、他國の地理を調査する如きことは到底不可能のことであるから、其記錄は信ずるに足らないといふやうな亂暴な議論を弄してをる。(九) 今彼の金人に關する考證も殆んど之に讓らないほど亂暴な議論であるが、先づ順序として其論說を紹介し、併せて其謬見を指摘して置かうと思ふ。彼は休屠王祭金人考といふ一篇をものしてをるが、其中に次のやうに論じてをる。(一〇)

張騫傳曰月氏者燉煌祁連間小國也、燉煌沙州也祁連天山也、

本皆月氏地、沙州天山之間有城焉、名爲昭武、昭卽佛之號、釋迦棄其家而從佛之地、月氏既爲匈奴所破、則遂散竄乎葱嶺之西爲十餘國、凡冠昭武爲姓者塞種也、塞卽釋聲之訛者也、此地奥崇釋教、而月氏國焉、故金像遂在其地、而爲去病所得用

彼は之に引續いて、更に後漢の明帝が金人を夢みたといふ傳說を引用して、世の佛敎信者が多く之を修飾して、佛の靈は能く其未だ中國に行はれざるに先立つて、帝の夢に現はれて、之を感悟せしめたといふが、それは全く誤つてをる、金の佛像すでに、前漢時代に渡來し、而も渾邪王休屠王に屬せる數萬の人々皆俱に塞內に移住し、其中には長安に入るものもあつた、凡そ之等の人々は、皆月氏種族であるから、其間には必ず佛を奉ずるものがあつたに違ひない、佛を奉ずる者は皆其金像を以て宗主としたから、中國人のうちには之を瞰く者が多くあつたに違ひない、そこで、此金像のことが轉々して遂に上聞に達したのである、斯くして、明帝は已に之を聞知してゐたから、その形相を夢みたのであると說いてをる。

凡そ夢中に現はれる材料は必ず嘗て多少經驗したことに限られることは心理上の事實であるから明帝が金人を夢みたのは、豫て明希が佛像に關することを傳聞してゐた爲であるといふ推定は、正當な見解として是認するが、併し大月氏が塞種の地に移る以前、すでに、其地に佛敎が行はれてゐたといふやうな考定には、全然同意することは出來ぬ。『前漢書』西域傳の烏孫並に、罽賓の條に於ける、塞種（Sakas）に關する斷片的記錄に基いて考察すると、遊牧人種たる塞種本來の根據地は、伊梨（Ili）河域の西方の地であつたのであるが、匈奴の老上單于が燉煌祁連の間に、據つてゐた月氏を擊ち、其地を奪ふたところが、月氏は西に徙つて、塞種を攻破し、其地を占領した。そこで、塞種は Hindū Kūsh を越へて、罽賓（Kaśmer）に、入

つたのである。印度に入つた後は、塞種も勿論佛教的感化を受けたであらうが、なほ伊梨河流域の原住地に據つてゐた時分に、既に塞種が、佛教を奉じてゐたとは想はれない。月氏が匈奴の爲に其原住地を逐はれて、西方に徙つたのは、老上單于の時代であるから、塞種の移動も、亦殆んど、それと同時代に起つたものと、見ねばならぬ。而して老上單于の即位は、西紀前一七四年であつて、其歿年は、同一六一年——老上單于の歿年に就いては、一五八年説もあるが、今はその何れにしても、差支ない——であるから、それより以前に、既に、伊梨地方に佛教が行はれてゐたといふやうなことは、甚だ疑はしい。然るに其時代に於て、伊梨よりも、遙か東方なる、張掖塞外までも、佛教が行はれてゐたといふことは、尙更疑問であつて、殆んと信ずるに足らない。其他程氏が、或は昭武といふ名稱を、佛に關係せしめ、或は休屠、及び渾耶の衆人を、月氏種族であるなどと主張する如きは、無知も亦甚だしいと、いはねばならぬ。固より佛陀(Buddha)といふ梵語と、昭といふ漢字とは、其意義に於て、全然無關係ではないが、支那に於ては、古來佛陀を意譯するに、覺若しくは、淨覺の文字を以てしてをる。又月氏は、匈奴に破られて西方に走り、塞種の地を奪ふたが烏孫は、元月氏に舊怨があつたから、其昆莫(王)は匈奴の援助を得て、之を破り、更に西南に走らしめた。かくて月氏は、遂に、大夏(Bactria)の地に、侵入するに至つたのであるから、月氏民族は最早その原住他附近には、多く殘留してゐなかつたのである。故に塞内に入込んだ休屠及渾耶の衆人は、月氏ではなくて、匈奴であることは、炳かである。要するに、程氏の金人に關する考證は、誤謬に充ちてゐて、全く信用するに、足らないのである。

かくの如く、古來支那の學者は、多く休屠王の金人を以て、佛像と推定してをるが、其推定に對しては、總て何等の權威も、認められないと言つてよい。

五

今や、余自身の卑見を、開陳すべき順序となつた。余は休屠王の金人は、斷じて、佛像でないと信ずるのである。その故如何といふに、霍去病が金人を獲た當時、即ち、元狩二年（西紀前一二一年）以前には、未だ佛像の製作が、なかつたからである。勿論比較的古い佛典中に於て、佛在世時代、すでに、佛像製作せられ、且崇拜せられてゐたものゝ如く、說いてあるが（一一）現存の遺物に徵すれば、此種の記錄は、信じ難いのである。即ち、印度史上有名な、阿育（Aśoka）王時代（西紀前二七二―二三二年）に、建てられた、佛陀伽耶（Buddhagayā）の摩訶菩提寺（Mahābodhi-vihāra）の石垣內に殘れる、彫刻を始めとして、其の後遠からざる時代即ち、西紀前一二世紀の製作に係る、Bharhūt 及び Sauchi の石垣石門の、彫刻を見るに、何れも、佛像の現はれ來るべき所に於て、前者に於ては、只佛座のみを示し、後者に於ては、只佛足形のみを表はし、佛の形像は、一として、現はれてゐない。惟ふに、之れは一般學者の認めてをるやうに、佛の形像は、神聖にして瀆すべからずとの、敬虔な心情より殊更その表徵のみに止めて置いたのであらう。而して、其後 Peshāwar を中心として、勃興した、所謂犍陀羅（Gandhāra）美術に至つて、初めて佛像の製作を、見るに至つたのである。此美術興起の時期に就いては、學者の意見必ずしも、一定してゐないが、西紀後一二世紀頃が、此美術の成熟期であつて、如何に遠く遡つても、西紀前一世紀より、以前に遡ることは出來ないのである。（一二）

故に佛像の史的研究に基けば、何うしても、前漢武帝時代に既に佛像が印度に於て製作せられ、而も、それが、遙か東方の張掖塞外まで、傳來してゐたと、斷定することは出來ぬ。從つて休屠王の金人は、決して、佛像でないと、言はねばならぬ。

六

果して、休屠王の金人が、佛像でないとすれば更に、進んで、其何ものたるかを、究明せねばならぬ。此金人が佛像でない以上は、之は匈奴固有の宗教に關係せる神像か、若しくは、他の民族の宗教に關係せる神像か、二者、いづれか、一でなければならぬ。

匈奴傳に依ると、匈奴の諸酋長は、毎年正月單于の庭祠に、小會を催し、五月には、龍城に、大會を催して、其先祖天地鬼神を、祭つたといふことである。然りと、すれば、此金人は匈奴が、毎年正月と、五月とに行ふ、祭祠に關係せる、神像ではなからうかとも想はれる。併しながら『漢書』に於て、此金人分捕のことが、再三記載せられ、特筆せられてをる所から察すると、之を漢人に取つて、餘程目新しいものであつたに違ひない。若し之が從來匈奴の祭祠に用ゐられてゐるやうな普通のものであるならば、古來軍事上、若しくは、交通上、匈奴と、密接の關係のあり、從つて其内情を、知悉してをる、漢人が、さほど珍重すべき筈がない。尚又武帝が、之を雲陽の甘泉宮に祭つた所から考へると、其製作に於ても拙劣なものでなつたことが、推定せられる。

然るに、匈奴傳には、前漢文帝の代（西紀前一七五―一五七年）漢使が、「匈奴父子同穹廬臥、父死妻其後母、兄弟死盡妻其妻、無冠帶之節闕庭之禮」といひ、又宦者中行悅は、「匈奴之俗、食畜肉、飲其汁、衣其皮、畜食草飲水、隨時轉移」、

といつたと、傳へられてをる。これに由つて觀ると、元來匈奴は、遊牧人種であつて、極めて、野蠻な生活を、營み到底當時に於ける、最高の文明人たる、漢族の珍重する如き、美術品を、製作し得るやうな、能力を持つてゐなかつたことは、明かである。從つて此金人は、本來匈奴の祭事に關係せるものでもなく、又匈奴の、造つたものでもないと、判定せねばならぬ。若し果して、然りとすれば、之は何うしても、他の民族の宗教に關係せる神像が、匈奴へ傳來したのであると、推斷せざるを得ない。

然らば、其金人は、何處から傳來し、又如何なる種類の神像で、あつたであらうか。

七

古代の支那附近の民族中には、斯る神像を鑄造するほどの、文化的地位に、達したものは、なかつた。彼等は、いづれも、未だ技術的開發に、觸れてゐなかつたのである。(一三) 所謂、西域地方に於いて、甘肅に最も近いところで、而も最も文化の發達してゐたところは、言ふまでもなく、大夏(Baktria)である。大夏は、古代波斯に於ては、Bākhtri 若しくは、Bākhdhi と、稱せられ、現今 Balkh と名けられ、烏滸水 (Oxus) 即ち、今の Amū Daria 流域に接せる極めて豐饒な地方である。從つて、此地方は、古代より開發し、Strabo の傳ふる所に依ると、此地方にて、一千の都市があり、嘗て波斯王國の領土となつてゐた際には、此地は Ariana の裝飾として、誇られてゐたといふことである。而して、波斯文學に於いては本來 Skythian の女神たる、Anahid 崇拜の中心地として、知られ、其の女神の殿堂も、此の地に設けられてあつたといふことであるから(一四) その文化開發の程度を察することが出來る。その後、紀元前三百年代の、初期 Alexander 大王が、印度

遠征を企て、此地方を占領した時にも、大王は其土人を庇護し、土人も亦能く希臘文明を受容し、之と、同化するに至り、其結果此國は、東洋に於ける、希臘文明の一中心地となつた(一五) 大王西歸の後には、その遺將、Seleukos は、Mauryа 王朝の始祖 Candragupta と和し、婚姻を結び、印度との交通頗る頻繁となり、その後の希臘諸王も亦相變らず、印度との交通を持續したことは、種々の史實に依つて、明かである。故に此地方には夙に祆教、即ち Zarathushtra の宗教も盛んに行はれてゐたが、又波斯王國時代から、印度の溼婆(Siva)神の信仰も、流入してゐたのである。(一六) 西紀前二五九年から、其の翌年にかけて、阿輸迦(Asoka)王が、佛教傳道の大事業を企てた際、この地方へも布教師を派遣し、大成功を得たことは疑ふことの出來ない事實である。(一七) 故に、この地方には、印度の婆羅門教も、佛教も、行はれてゐたのであるが、その後、漸次佛教は、他の宗教を壓服して、一時この地方が、小王舍城と呼ばれたほど、佛教隆盛に赴き、Hindu Kush 以北に於ける、各地佛教界の中心となつた。かくの如く此の地方へは、夙に印度の、宗教文明が、輸入せられてゐたのであるから、印度で造られた神像の如きも、傳來してゐたに違ひない。前述したやうに、佛像は、犍陀羅美術の興起するまでは、出現せなかつたけれ共、佛像以外の、諸神の像の造られてゐたことは、Bharhut や、Sauchi やの石垣石門の浮彫を觀れば、明かであつて、之等には、姿勢優美な藥叉神や、龍神やの、神像が、顯はれてをる。かやうに、佛教と關係のある諸天の像が既に刻まれ、而も之れ等が Yabana 人の間に傳はつてゐたとすれば、貨幣鑄造の技術を有する、彼等がその像を、鑄造し得ることも、當然であると

いはねばならぬ。西紀前一九〇年即位した、Baktria Kābul 及び Panjāb の王 Demetrius は、實に立派な、大型の貨幣を鑄造し、其の裏面には、星で飾られた王冠を戴いてをる、Baktria の女神たる Anahid の像が、打出されてをる。尙又 Demetrius の孫であつて、彼を破つて西紀前一七五年王位に即いた、Eukratides も、亦大貨幣を鑄造した。（一八）之等、技術上精巧を極めた貨幣鑄造の事實に依つて觀ても、佛敎信者たる彼等の間に、佛敎と關係のある諸天の像が、鑄造せられてゐたことが、推定せられ得る。

今『史記』や『漢書』やに、謂ふ所の金人とは、多分、斯る印度神の一つを、鑄造したものであらうと想ふ。然らば、如何にして、Baktria 地方に在つたものが、西紀前一二一年頃に、遙か、遠隔の地たる、甘肅省附近まで、傳來したかといふに、思ふにその媒介をなしたものは、月氏民族であつたであらう。すでに、一言したやうに、月氏は、匈奴の冒頓單于に破られ、次で老上單于の爲に、その王さへも、攻殺せらるゝに至つたから、彼等は西方に徙り、當時伊梨河域に據つてゐた塞種の地を占領したが、烏孫の爲めに、又その地を逐はれて、更に、西南に走り、嬀水（Amu Darīā）の北方に移住して、南方大夏を臣服したのである。かの張騫が月氏に使したのは、正に此の時代であつて、彼の月氏に着いたのが、凡そ、前漢武帝元朔元年（西紀前一二八年）に相當する。この時は、未だ月氏は、河北の王庭に在つて、河南の藍市城（今の Balkh）には徙つてゐなかつた、けれども、既に、大夏の支配權を有し、殊にその隣接地たる Terghana は夙に大夏の文化に浴してゐた、のであるから、（一九）未だその固有の遊牧的風俗を、全く變更するには至らなかつたが、漸く、大夏の文化に、感化せられてゐたことは、疑ひを容れな

い。而も當時、月氏は、匈奴に對する舊怨を忘れて、張騫の提議した、匈奴挾擊の計企に贊成しなかつたのである。斯くの如く大夏の文化に浴した月氏は、匈奴と境を接して、而も之れと爭ふ意志がなかつたとすれば、彼等を通じて、何等かの事情に依つて、Baktria に在つたものが、匈奴に傳はるといふことは、當然あり得ることである。而して、休屠王は、匈奴の西邊に據つてゐたのであるから、西方との交通には、最も、都合の好い地位に在つたのである。故に、元大夏に在つた、印度の神像が、彼れの手に入つたのであらう。かくして、休屠王の所有に歸してゐた金人が、霍去病の分捕する所となり、之れを內地に送つた所が、漢人は珍奇なものとして、目をそばだて、武帝は立派なものとして、之れを甘泉宮へ安置したのである。

古來の學者の中、以上の結論に最も近い說を發表してをるものは『漢書疏證』の撰者沈欽韓である。彼は此の金人を以て、匈奴の祠る所の神にして、佛に非ずと斷じ、西域國の天神は佛敎に所謂摩醯首羅(MahesVara)即ち大自在天であると言つてをる。併し只記錄の上では休屠王の祭天の金人と見ねてをるばかりであるから、果して、この金人が摩醯首羅であつたか、何うかは、判らないが兎に角、本來印度神の像であつたに、違ひないと思ふ。

註

(一) 梁寶長房撰『歷代三寶紀』卷一。宋志盤撰『佛祖統紀』卷三十四。元熙仲撰『釋氏資鑑』卷一。元念常撰『佛祖歷代通載』卷四。明心泰撰『佛法金湯編』卷一。『古今圖書集成』釋敎部彙考卷一。

(二) 『前漢書』地理志に於ける雲陽縣の條下には「有休屠王金人、及徑路神祠三所、越巫塘鄭祠三所」と記してある。

(三) 『前漢書』郊祀志には「雲陽有徑路神祠、祭休屠王也」と錄してある。

（四）「史記」匈奴傳にいふ、「其秋單于怒渾耶王休屠王居西方、爲漢所殺俘數萬人、欲召誅之、」と。

（五）沈欽韓撰「漢書疏證」卷二十九。

（六）同書卷三十四。

（七）「史記」卷六秦始皇本紀には「十年……春、王乃迎太后於雍而入咸陽復居甘泉宮」といひ、又「十四年……韓非使秦秦用李斯謀、留非、非死雲陽」と記す。

（八）「通志」卷一百九十八。

（九）「程氏考古編」（「函海」第十四—五册所收）卷八。

（一〇）「圖書集成」神異典第九十二卷、佛像藝文三所收。惟ふに本篇は程大昌の著「演繁露」中に編入せられてをるものであらう。併し余は未だ該書に接する機會を持たないから斷言することは出來ぬ。

（一一）「增一阿含經」卷二十八。「觀佛三昧海經」卷五。「根本說一切有部毗奈耶雜事」卷十七、卷三十八。

（一二）松本文博士論文「佛像の美術史的研究」（「哲學研究」第一卷第一號所收）參照。

（一三）Friedrich Hirth—Ueber Fremde Einflüsse in der chinesischen Kunst. S. 11.

（一四）H. G. Rawlinson—Intercourse between India and the Western World. P. 70.

（一五）V. Smith—Early History of India, P. 207.

（一六）H. G. Rawlinson—Monograph on the Oxus. J. R. G. S., PP. 504-13.

（一七）拙著「西域の佛教」五五—六頁、六三頁參照

（一八）Gardner—Catalogue ofGreek and Indo-Scythic Coins in the B. M. II,9-12. III, 1. V, 8.

（一九）F. Hirth—Ueber Fremde Einflüsse in der chinesischen Kunst. S. 23.

叢說

ビスマルクの研究と大戰

文學博士　原　勝　郎